

<全体分析>

試験時間 120 分

解答形式  
記述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)  
難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴

読解総合：内容説明，英文和訳  
英作文：和文英訳，自由英作文 (会話文下線部補充)

入試改革を踏まえた出題

大問Ⅳの自由英作文では会話文下線部補充問題が出題され，コミュニケーション能力を問う出題となっている。

その他トピックス

読解問題においては，2020 年度と対照的に大問Ⅰは和訳問題のみとなり，大問Ⅱも和訳問題が大幅に増えた。大問Ⅱでは，19 世紀後半の英文からの引用部分に設問が集中している点特徴的である。自由英作文では2018 年以來の会話文下線部補充問題が出題されたが，人物関係を踏まえた丁寧表現の選択などは必要とされない。ただし語数指定があるのが特徴的である。大問Ⅲは前年度と同じくオーソドックスな和文英訳問題。

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	英文解釈	「物語の効用」 (565words)	(1)while から始まる節は as they happened まで。concentrating ... as they happened は節内の分詞構文。as they happened は specific details を限定的に修飾している。the universal と the accidental とが対比的に用いられている点にも注意。Hence the justification.は Hence it is justified.と同義。 (2)1 文目の with our shields up と 3 文目の we drop our intellectual guard は内容的に対比関係にある。rubbery は「(ゴムのように) 弾力がある」の意味で，easy to shape 「変えやすい」と内容的に連動する。 (3)第 1 文の主語の They は businesspeople and lawyers を指す。act on them の them は another person's feelings を指す。clinch a deal 「商談をまとめる」は難しい表現。第 2 文の the person on the other side はこの下線部の another person; other people; the other person がビジネスや訴訟で対峙する「相手」のこと。第 3 文では who 以下文末までが関係代名詞節。	標準

II	読解総合	<p>『種の起源』に対する同時代の反応—ジョージ・ヘンリー・ルイスによる評価』 (716 words)</p>	<p>(1) 設問の指示を見落とさないことがまず肝要。文章全体、とくに第5パラグラフ最終2文の内容から考えると、Lewesはmonism「一元論」とdualism「二元論」のうちmonismの立場を支持していることがわかる。第2パラグラフに挙げられた要因のうち、この点に関わるのは第5文の内容であるので、ここを抜き出して訳せばよい。</p> <p>(2) 非常に長いセンテンスなので、主節を中心とした大きな文構造、そしてダッシュの前後で並べられた、2つのthat節の役割を見誤らないことがまず求められる。語句の面では、willの意味で用いられているshall, what may be called ... 「…と呼びうるもの」、onlyの意味で用いられている副詞butなどが目につくが、しっかりとした語彙力が試された1文でもある。</p> <p>(3) 第1文では、挿入されているwhat would otherwise be inexplicableが、the surprising ease and passionを説明していることが理解できたかどうか最初のポイント。with which以下の関係詞節を先行詞とあわせてどう処理するかは力量の差が出るだろう。incompetentやrefuteは難しい単語だが、それぞれcompetentからの類推や、adoptとの対比から語義を推測したいところ。第2文はやや日本語の処理に悩む箇所もあるが概ね標準的。ただし最後のwith no better equipmentは難しい。equipmentがここでは「知識」の意味で用いられており、no betterとあわせて「同じくらい乏しい知識」の意味であることを理解するのは容易ではない。最後のWhy not?は文脈を踏まえて訳出する必要がある。</p>	難
----	------	---	---	---

Ⅲ	英作文	「一步踏み出す 勇気」	2017年度に続いて、諺を題材とした和文英訳問題が出題された。「転ばぬ先の杖」は諺そのものの英語表現を知っていなくとも、文意を考えることで処理できる。「痛い目」も2017年度に出題されている。「円熟味が増す」や「武器」などは全体の内容をよく理解した上での英訳が必要。また、「…する勇気」や「…した経験」など普段から練習を積んできた表現は確実に処理したい。例年通り、京都大学らしい出題となっている。	標準
Ⅳ	英作文	「拙速な一般 化」	毎年出題形式の変わっている自由英作文問題であるが、2018年度に続いて、長文の対話文を用いた下線部補充の自由英作文問題が出題された。ただし、下線部ごとの細かい語数指定や使用すべき語の指定がついている出題は京都大学では初めてのもので、ややわずらわしさを感じたかもしれない。比較的書きやすい問題であったが、(1)(2)のいずれかと(4)の内容には連動性が必要。また、(3)では、一部分についての経験から全体についての一般化をしよう例を書く必要がある。	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## <学習対策>

読解問題の内容説明問題では、どこまでを解答に盛り込むか、そして該当箇所をどこまで正確に読むことができたかが問われる。該当箇所がほぼパラグラフ全体に及ぶ問いが出題されることもあるが、単なる要約問題ではなく、問題文の要件に合致する記述を抜き出す必要がある。今後とも下線部和訳と内容説明問題の融合型の出題となる可能性は高いので、今年和訳の比率が高かったからと言って和訳だけに偏らずバランスの取れた学習を心がけること。英作文では大問Ⅲは英訳問題が定着しつつあるようだ。過去問の英訳問題の練習を含め、各人の実力に合わせた演習を積む必要がある。自由英作文問題は、昨年度が手紙の形式であったが、今年は会話文下線部補充問題と、まだ形式的に固定していない。さらに形式が変わる可能性は十分にあるので、形式にこだわらず、さまざまな形式の問題に触れ、実際に答案を作る演習をすることをすすめる。ここまでの自由英作文の出題は「前後関係を見据えた表現の選択」「状況、人物関係に応じた表現選択」が問われたことが多いので、その点に留意して演習を積んでほしい。